

【講演会等報告】

北方先住民族の狩猟と毛皮

日下 稜

開催日：2021年3月10日(水)
 開催方法：オンライン (Zoomにより実施、YouTubeで配信)
 主催：北極域研究加速プロジェクト (ArCS II) 沿岸環境課題
 協力：北海道立北方民族博物館

プログラム

- 杉山 慎 (北海道大学低温科学研究所・ArCS II 沿岸環境課題代表)
北極域の気候変動が狩猟と毛皮に与える影響? : ArCS II プロジェクトの取り組み
- 山口未花子 (北海道大学大学院文学研究院)
皮から見るカナダ・ユーコン先住民の暮らし
- 日下 稜 (北海道大学低温科学研究所)
グリーンランドイヌイット：高性能毛皮ジャケットのある暮らし
- 大石侑香 (神戸大学大学院国際文化科学研究科)
好きな毛皮は何ですか? : 西シベリア・ハンティの毛皮利用の変容と現在
- 近藤祉秋 (神戸大学大学院国際文化科学研究科)
気候変動適応策としての SNS 利用の可能性 : 内陸アラスカの事例から

**北方先住民族の
狩猟と毛皮**

近年の気候変動や都市化などにより伝統的な暮らしを続けてきた北方先住民族の暮らしが急速に変化しつつある。気候の変動は高緯度地域ほど大きく、また伝統的な生活ほど自然環境の変化による影響を受けやすい。さらに、本ワークショップで取り上げる毛皮を日常的に利用している民族が所属する国は、主に先進国であり、文明が入り込むと一気に生活環境の変化が起こりやすい。とりわけ狩猟による食料の獲得とそれらを利用した、毛皮製品の制作は気候変化の影響を受けやすく、また文明社会との軋轢を生む要因の一つともなっている。

本イベントは各地で暮らす北方先住民族の狩猟の現状について報告した後、それぞれの地域での地理的要因や国の政策、民族性による違い、これから起こりうる生活環境の変化、文化の保存や継承、記録の在り方について討論を行った。

2021年3月10日(水)
17:00~19:30 YouTubeにてライブ配信

オンライン開催 (申し込み・事前参加申込み不要です)
QRコードは下記URLからお申し込みをお問い合わせください
https://forms.gle/Va3yJ8bmyMu/kh7

主催：沿岸環境加速プロジェクト (ArCS II) 沿岸環境課題 協力：北海道立北方民族博物館
お問い合わせ：北海道大学 低温科学研究所 米河・東原グループ 日下 稜
Tel: 011-706-5482, E-mail: kusaka@lowtem.hokudai.ac.jp

講演会のポスター

企画の趣旨

近年、気候の変動や都市化などにより伝統的な暮らしを続けてきた北方先住民族の暮らしが急速に変化しつつある。気候の変動は高緯度地域ほど大きく、また伝統的な生活ほど自然環境の変化による影響を受けやすい。さらに、本ワークショップで取り上げる毛皮を日常的に利用している民族が所属する国は、主に先進国であり、文明が入り込むと一気に生活環境の変化が起こりやすい。とりわけ狩猟による食料の獲得とそれらを利用した、毛皮製品の制作は気候変化の影響を受けやすく、また文明社会との軋轢を生む要因の一つともなっている。

本イベントは各地で暮らす北方先住民族の狩猟の現状について報告した後、それぞれの地域での地理的要因や国の政策、民族性による違い、これから起こりうる生活環境の変化、文化の保存や継承、記録の在り方について討論を行った。

初めてのオンラインイベント

本イベントは、北極域研究加速プロジェクトの沿岸環境課題が主催し、北海道立北方民族博物館の協力をいただいた。当課題が主催する初めてのオンラインイベントであり、手探りでの開催となったが多くの人に視聴してもらうことができた。配信方法は、少し手間はかかるが視聴者に気軽に参加してもらうことに重点を置き、司会者・講師を Zoom でつなぎ、YouTube で配信することとした。北海道大学では Zoom の教育アカウントを団体契約しており、教職員は追加料金なしでライブストリーム機能を利用することができる（Zoom ウェビナーの利用には別途有料プランの購入が必要）。YouTube 側は無料アカウントでライブ配信が可能なので、追加の費用がかからなかったことも YouTube を利用した理由の一つである。ただし、YouTube のライブ配信には設定が必要で、設定してから配信機能が有効になるまでに 24 時間かかるため注意が必要である。受け付けには Google フォームを利用した。

当イベントを開催したのは3月上旬であり、新型コロナウイルスの流行も、第3波と第4波の間のやや落ち着いていた時期であった。そのため多くの公共施設も開館しており、チラシ・ポスターによる宣伝活動を行うことができた。ただ、宣伝効果が最も大きかったのは SNS であり、とりわけ博物館等の公式 Facebook や Twitter にイベント情報が投稿された直後には申込者数が一気に増加した。また、北海道新聞および読売新聞に掲載されたことから、研究者や学生以外の参加者も多かった。190 名の参加登録があり、YouTube 配信中の最大同時視聴者数は 113 名だった。また、本イベントでは視聴者とのやり取りができるよう、YouTube のコメント欄を開放したところ、配信中に 51 件もの質問・コメントが寄せられた。これはオンライン開催、特に YouTube のコメント欄という気軽さが良い方に働いた事例だと思う。次々と投稿されるコメントを整理してくれた当研究所博士課程の波多さんには非常に感謝している。



YouTube による配信の様子

オンライン開催の良いところ悪いところ

最大の利点は、家に居ながらにして、世界各地の研究者の話を聞けることであることは言うまでもないが、今回の様に YouTube で公開することにより講師へ質問することへのハードルも下がっているのではないかと感じられた。コロナ下でのオンラインイベントの増加は、研究成果の普及にも一役買っているのではないかと思う。また、講師も移動が伴わないため、日程の調整が付きやすく、一度に多くの専門家の話を聞くことができるのも一般向けのイベントを企画する上では有利である。講師の旅費がかからないため開催費用も安く済む。

一方、オンライン開催はインターネット回線に依存するため、不確実な要素が多いのも事実である。多くの講師をつなぐ場合、回線が一ヶ所でも不安定だとイベントに支障が出

る。特に今回は Zoom と YouTube という 2 つのシステムを介したため、入念に事前準備を行う必要があった。また、このシステムを使用する場合は Zoom と YouTube との間に、20 秒ほどのタイムラグが生じるため、コメント欄を開いていてもすぐにコメントに回答できるわけではない。このように、イベント開催に当たり不確実な要素は、現地開催に比べて多く、リハーサル等の重要性もオンラインの方がより高いと感じた。私は Zoom のホスト、YouTube 配信をしながら、講演も担当したため、常に緊張しっぱなしであった。この点は私の采配のまずさが原因であるが、配信者と講師は分けることを強くお勧めしたい。

今回は毛皮をテーマにしたイベントだったが、やはり毛皮は触ってはじめてその良さが分かるため、現物に触れてもらう機会は重要である。来年度には、世界各地の毛皮を集めて、実際に触ってその良さを体験できるイベントを計画している。シベリア、カナダ、グリーンランドなどからトナカイ、オオカミ、ビーバー、ヘラジカ、アザラシ、キツネなど合計 20 種類ほどの動物の毛皮が集まる予定である。オンラインイベントで毛皮に興味を持った人たちがこちらにも参加していただけると嬉しい限りである。

(くさか・りょう／北海道大学低温科学研究所)

【講演会等報告】

暮らしの変化と文化伝承 ーグリーンランド・イヌイットとアイヌの事例ー

日下 稜

開催日：2021年6月19日（土）
開催方法：オンライン（Zoom ウェビナーによる配信）
共催：北極域研究加速プロジェクト（ArCS II）沿岸環境課題、
国立アイヌ民族博物館
後援：札幌市、白老町

プログラム

日下稜（北海道大学） グリーンランドイヌイットの狩猟と気候変動による暮らしの変化
林直孝（カルガリー大学） 変化とともに生きるグリーンランド人：「らしさ」の源
関口由彦（国立アイヌ民族博物館） アイヌ文化伝承活動の〈現在〉
八幡巴絵（国立アイヌ民族博物館） 白老のアイヌの漁業ー昭和期を中心に
総合討論司会：是澤櫻子（国立アイヌ民族博物館）

企画の趣旨

現代の私たちの生活や文化の伝承の仕方は気候の変化や国の政策転換など近年の自然的、社会的、政治的環境の変化をうけ刻々と変わっている。極北、寒冷地域を伝統的な居住地としてきた先住民族の暮らしは、とりわけ大きくその生活様式が変化している。

グリーンランドでは、イヌイットは気候の変化と近代化により、その生活様式が大きく変化している。とりわけ冬期の犬ぞりによる狩猟は、海氷の状態に大きく左右されるため、その変化が著しい。一方で、気候の変化により暖かくなった土地では牧羊が行われ、ジャガイモなど寒さに強い作物の栽培が行われている。

アイヌは、近代化の過程で大きな文化変化を経験し、現代において多様な形で文化を受け継ぐと同時に、新たな文化を生み出している。その活動は北海道を中心としながら、道外や首都圏にまで及び、新たなアイデンティティの創造につながっている。また、地域社会の暮らしの変化と伝承の変化をみることも重要である。海での漁を主生業としてきた地域では、漁法の近代化が進み、漁具に大きな変化が見られる。

本ワークショップでは、グリーンランド・イヌイットとアイヌの暮らしの変化の事例か



講演会のポスター

ら、先住民族の文化復興・文化創造の向かう先について考えてもらうことを目的とした。

コロナ渦での開催

当初、本イベントは国立アイヌ民族博物館にて実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大を受けて、オンライン開催へ切り替えた。オンライン講演ツールは Zoom ウェビナーを使用し、参加定員は 500 名とした。配信元は北海道大学低温科学研究所、講演者は国立アイヌ民族博物館(北海道白老町)、北海道大学低温科学研究所(北海道札幌市)、カルガリー大学(カナダ・アルバータ州)からそれぞれ参加した。

新型コロナウイルスのため、大学、図書館、博物館、科学館など公共施設が軒並み閉鎖していたため、ポスターによる宣伝が思うようにできず、SNS、メーリングリスト、主催団体のウェブサイトへの掲載を中心に広報活動を行った。また、開催 1 週間前の 6 月 12 日に国立アイヌ民族博物館のある東胆振地方の地元紙「苫小牧民報」に当イベントの記事が



Zoom ウェビナーによるオンライン配信の様子

掲載された。その結果 214 名の申し込みがあり、6 の国と地域から延べ 148 名の参加があった。申し込みは Google フォームを利用し事前質問も受け付けた。当日の質問と合わせて 28 件もの質問がなされ、非常に高い関心があることが伺えたが、十分な質疑、討論の時間を取ることができなかったのが残念である。当日時間が足りずに回答できなかった質問の一部に関しては、後日講師陣による回答を公表した。

講演会の意義

北海道民族学会や日本文化人類学会のメーリングリスト、北海道立北方民族博物館や国立極地研究所の SNS を通じてこのイベントを知った人が多く、参加者の多くが研究者や学生であった。また事前に寄せられた質問等も比較的専門的な内容が多かった。アンケートの結果からは、一般の参加者にも比較的好評であり、広く先住民の現在の暮らしを知ってもらおうという当初の目的は達せられたと考えてはいるが、今後はさらに幅広い層の人々に興味を持ってもらえるようなイベントを企画したと思う。

(くさか・りょう／北海道大学低温科学研究所)

【講演会等報告】

第35回北方民族文化シンポジウム網走

「大林太良・学問と北方文化研究—大林太良先生没後20年記念シンポジウム—」

中 田 篤

開 催 日：2021年10月16日（土）・17日（日）

開 催 方 法：原則としてオンライン開催（Zoomにより実施）

主 催：一般財団法人北方文化振興協会・北海道立北方民族博物館

後 援：網走市、網走市教育委員会、北海道民族学会、北海道考古学会、
北海道博物館協会

本シンポジウムは、例年この時期に網走市で開催されている。年ごとに北方先住民文化に関連するさまざまなテーマが取り上げられ、当学会も継続的に後援してきた。昨年は新型コロナウイルスの影響で中止となったが、今回は原則としてZoomウェビナーによるオンラインで開催された（近隣からの参加者向けに、パブリックビューイング方式も併用）。

今年は北方民族博物館初代館長・大林太良氏の没後20周年を記念し、大林氏の業績を振り返り、今後の北方文化研究の方向性と展開を検討するという内容となった。運営委員を務めていただいた荻原真子氏（千葉大学名誉教授）の趣旨説明に続き、二日間にわたって11名の研究者が発表した（次頁参照）。

1日目の第一部は「大林先生の学問研究とその魅力」というサブテーマの下、大林氏と交流があった研究者を中心に、大林氏の研究の多様な側面を振り返る内容となった。

クライナー ヨーゼフ氏（ボン大学名誉教授）は、大林氏の研究に大きな影響を与えた海外留学時のエピソードを中心に、アイヌを含む日本民族文化の起源と形成を明らかにするという壮大な研究テーマにつながる研究歴をたどった。

次に、横山廣子氏（国立民族学博物館名誉教授）は、大林氏の指導を受けた学生時代のエピソードを交え、自身が大林氏の思考モデルや方法論を参考に中国の少数民族ペー族の研究を進めたことを示した。

大林氏の業績は専門の民族学・文化人類学にとどまらず、関連する様々な学問分野にも影響を及ぼした。松村一男氏（和光大学教授）は、大林氏の神話学に関する一般読者向けの著作を列挙しながらその内容を解説し、大林氏の神話学研究に対する貢献について紹介した。石井正己氏（東京学芸大学教授）は日本民俗学の立場から、日本民族起源論に関する大林氏の研究の位置づけを試みた。シンジルト氏（熊本大学教授）は、日本の社会組織と生業形態を関連付けた大林氏の論考を再評価し、自身のカザフ人コミュニティに関する研究と共通点を指摘した。

大林氏は、北方文化研究にも深い関心を寄せていた。2日目の第2部は「北方文化研究の可能性」というテーマの下、国内の北方文化研究拠点に所属する研究者に、それぞれの研究と大林氏の業績との関わり、所属機関における北方文化研究の概要や将来的な展望について紹介いただいた。

北方民族文化シンポジウム網走プログラム

10/16(土)		10/17(日)	
08:30	受付	08:30	受付
09:00	開会式	09:00	第2部:北方文化研究の可能性 「国立アイヌ民族博物館の役割—アイヌ文化研究の方向性—」 佐々木史郎(国立アイヌ民族博物館)
09:30	第1部:大林先生の学問研究とその魅力 「大林太良先生の歴史民族学のルーツ—岡正雄、R.ハイネ＝ゲルデルンとA.イエンセンの恩師たち—」 クライナー ヨーゼフ(ボン大学) 「周縁部から見る中国のエスニシティ—雲南省大理盆地のペー族の動態」 横山廣子(国立民族学博物館) 「大林太良先生の神話学」 松村一男(和光大学)		「環北太平洋地域の先住民文化に関する比較研究—大林太良と渡辺仁の視点」 岸上伸啓(国立民族学博物館) 「北方狩猟採集民文化の形成:民族起源論から集団系統論へ」 加藤博文(北大アイヌ・先住民研究センター) 質疑・討論
12:00	昼食	12:00	昼食
13:30	「大林太良の遺産」 石井正己(東京学芸大学) 「牧畜民的な集団観の今—チングス・ハーンのカザフ人末裔たちとのめぐり合いから」 シンジルト(熊本大学) コメント:佐々木史郎、荻原真子	13:00	「エミシ研究とシベリア研究における民族学的視座」 高倉浩樹(東北大東北アジア研究センター) 「日本の北方文化研究における千葉大学の役割と日露研究協力関係」 吉田睦(千葉大学) 「北方研究における大林太良博士の功績とその言語学的意義」 呉人恵(北海道立北方民族博物館) 質疑・討論
16:00	質疑・討論	15:50	閉会式

佐々木史郎氏(国立アイヌ民族博物館館長)は、2020年7月に開館した国立アイヌ民族博物館における調査研究活動の理念と概要、今後の展望について紹介した。

岸上伸啓氏(人間文化研究機構理事・国立民族学博物館教授)は、環北太平洋地域の先住民文化に関する大林氏と渡辺仁氏の研究を比較し、その成果と課題について検討した。

加藤博文氏(北海道大学アイヌ・先住民研究センター教授)は、大林氏が指摘した北ユーラシアの基層文化に関連し、同地域の先史文化に関する先史人類学の最新の成果を紹介した。

高倉浩樹氏(東北大学東北アジア研究センター教授)は、アイヌと古代蝦夷に関わる比較研究を対象に、民族誌資料を分析する大林氏の方法論と思考の枠組みの今日的意義を検討した。

吉田睦氏(千葉大学教授)は、千葉大学文学部ユーラシア言語文化論講座の歴史をたどり、国際的共同研究の成果を含む講座の研究業績と今後の展望について紹介した。

最後に呉人恵（北海道立北方民族博物館館長）は、大林氏の北方文化圏に関する論考を言語学的に再検討し、北方文化研究における北方民族博物館の役割について展望した。

本シンポジウムは、二日間、各 9:00～16:00 と長時間にわたり、初めてオンラインで開催された。一つの会場に集まり、互いに討論するという通常の形で開催できなかったのは残念だったが、参加者は両日とも 70 名以上と例年をはるかに上回る数となった。この点では、移動に費やす時間や労力、費用が不要なオンラインの良さを実感することができた。

（なかだ・あつし／北海道立北方民族博物館）

【講演会等報告】

文化とランドスケープデザイン研究会の紹介

片桐 尉 晶 (保 昭)

はじめに

筆者は造園設計者であると同時に文化人類学者であり、公園や私庭園など多くのランドスケープデザインを手がけてきた。この現場において造園（ランドスケープ）デザインには、なにか人間的なものが欠けているのではないか？という疑問を常に抱き、この解決のために造園と文化を研究してきた。我が国でも「前空間」「負のプラトー」（片桐 2013:26,185）や、景観人類学の枠組みを「相律」の観点から提示する（河合 2016:279）など、ランドスケープデザインにおける実用も視野におさめた文化人類学の概念が徐々に提唱され始めている。これらを受けて筆者は、令和 3 年から文化人類学の知見をランドスケープデザインへの応用をめざし、また実務者と人類学者が相互の背景を活用した上での対話を模索するため、東京都立大学の河合洋尚と語り、令和 3 年 6 月から「文化とランドスケープデザイン研究会」を発足させた。この短報は文化とランドスケープデザイン研究会とはどんな研究会か、またこの研究会で明らかになったことを紹介したい。

1. 研究会について

この研究会は完全にオンラインで行われ、片桐と河合の呼びかけで集まったのは 8 名。ひと月からふた月に一度研究会を行う、全く費用をかけていない研究会である。回を重ねる度にランドスケープデザイン、文化人類学双方の分野から新たな参加者を迎えており、現在は常に 14 名程度の出席者がいる。出席者の内訳もランドスケープデザイン、文化人類学が、およそ半分ずつである。

この短報を執筆している段階で、5 回の研究会が開かれている。毎回の研究会は、まず発表者が研究成果を発表し、これに対して出席者全員がディスカッションを行うというものだ。今までの発表を下表に紹介する。

文化とランドスケープデザイン研究会のこれまでの発表

研究会開催日時	発表者(所属)	発表 テーマ
2021年6月21日(月)18:00～	河合洋尚(東京都立大学)	景観人類学の現在
2021年6月21日(月)19:00～	片桐尉晶(風土計画舎)	文化人類学とランドスケープデザインの考え方の違い
2021年8月2日(月)18:00～	陳昭(東京大学大学院)	中国の造園設計事務所での参与観察結果
2021年9月13日(月)18:00～	酒井裕司(イメージランドスケーププランニング)	まちづくりにおける先住民文化
2021年10月27日(火)18:00～	片桐尉晶(風土計画舎)	ランドスケープデザインにおける文化の問題点
2021年11月30日(火)18:30～	佐々木史郎(国立アイヌ民族博物館)	博物館展示とランドスケープデザイン

いずれの発表も参加者による熱心な質疑が繰り返されており、この情熱は今後も継続されよう。

2. 文化人類学の有用性と問題点

このディスカッションを通じて、私たちは文化人類学をランドスケープデザインに応用する際の有用性と問題点を徐々に明らかにしている。これらを簡単にまとめる。

2-1. 有用性

2-1-1. 思いがけない形態へのヒントを提供できる

ヒトは分業と協業によって環境への働きかけを行い、ランドスケープデザインを作り上げてきた。この歴史の中で分業と協業の手法を改良し洗練させてきたが、文化人類学は、この過程で失われてきたものを「文化」として顕在化し、新たな計画、設計のための手法として提示できる。

2-1-2. 計画設計プロセスにおける多数の調停

ランドスケープの計画設計は作り手や利用者を含め多くの人たちが関与するので、当然に利害や意思の統一は難しい。この状況では置き去りにされてしまう者や集団も出てこよう。ランドスケープデザインの職業集団はこういった人々の感性をいかにすくい上げるかについて現在でも試行錯誤を行っている。文化人類学の得意とする参与観察による新たな視点の提示は、こうした人々の感性を顕在化し、新たな計画、設計のための資源として提示できよう。

2-2. 問題点

2-2-1. 調査に時間がかかる上に有用性がわかりにくい

文化人類学では一年以上の参与観察が求められるが、これは経験的に導き出された調査期間であって、参与観察を1年行えば必ず計画設計に役に立つ手法や資源を提示できるという訳でもない。計画や設計に資するデータを確実に得られる参与観察手法の模索が行われてはいるが（例えば（Low 2017））、さらなる手法の発展を求められよう。特にコロナウィルス感染の世界的流行は参与調査を困難にしている。比較的予算や設計期間に余裕のある公共造園の現場においても、予算執行の視点からは厳しい実用性が要求される現状があるので、より期間の少ない調査方法の探求が必要とされているように筆者には思われる。

2-2-2. 倫理的優位性の表明

少数者への差別などを蔑むあまり激昂し、怒りを当然のように表明する文化人類学者は少なくないが、計画設計の現場では行ってはならない。話し合いやワークショップなどに参加してくれている人々の心を萎縮させ、率直な意見も新たなデザインも出てこなくなる（こうした告発的な態度をさして思想警察と呼ぶ者もいる）。計画設計のプロたちが作り上げてきた様々な唱導計画の手法ではこういった行為は厳禁されているが、なぜそうなのかは認識した方がいい。告発はデザインの試行錯誤をも禁じてしまう。

3. 今後の仮題についての覚え書き

とここまででは社会に資する観点からランドスケープデザインと文化人類学の関わり方についての考察であった。

加えて、ランドスケープに限らず、デザインにおいては「独創」が問題となる。この行為について文化人類学が資する方法はないだろうか。またランドスケープデザインは機械や彫刻、建築土木などと異なり、ある程度不定形な植物材料もこの「独創」に参加する。この二点について筆者なりの課題としてまとめておきたい。

3-1. 個的な独創への参加と評価について

事例として参加している人数が多い方が研究としては成立しやすい。しかし、デザインにおいては作家性も当然ながら評価される。こうした個的な作業をすべて社会の反映としてしまうには、創造のプロセスには未知の事柄が多すぎる。デザインのこの側面についてはこれからも研究会において議論を深めていく必要があると思われる。

3-2. 象徴的形態への偏重

人工物はすべて象徴物と扱えるし人工物に限定したほうが分析は楽である。しかしランドスケープデザインでは形態が一定していない植物や水も重要である。こういったものは気象や季節、経年変化によってヒトが意図した加工を超えて様々な様相を示し、ヒトの感性を喜ばせてくれる。こうしたおぼろげではかない形への感性とデザインについて研究会ではまだ手付かずの状態であり、これからの議論が期待される。

4. 解決に向かって

元来、ヒトは力を合わせることによって環境に働きかけ、この行為によってランドスケープを構築してきた。ランドスケープデザインといえば西洋式のプラザやパークシステムが世界標準であるが、これだけでなくボロロ族の中央広場やムブティ・ピグミーの児童広場、日本の神社、コンソ族の階層化された集落広場システムなど、文化の違いが見せる多面的なランドスケープは多い。

この行為には当然、多人数の共感と個々人の疎外が同居している。ヒトは社会性動物であり、私たち人間は生まれてから死ぬまで共感と疎外の葛藤のなかを生きていく定めである。ランドスケープデザインにはその葛藤の解決も求められてきたといえよう。この解決策として様々な文化における多様なランドスケープデザインは現れ、受け継がれてきたとも考えられる。だとしたら葛藤を生きる私たち人類が抱くべき、造形の指針を提供することによって、「文化」は役に立ったと言えるようになるだろう。

ここでデザイン実務者として筆者個人の考えを述べると、設計プロセスには、設計者個々人の産みの苦しみと「ひらめき」といった内発的な行為には、社会の反映だけに止まらない葛藤がつきまわっている。この局面においては、社会の反映の側面だけではなく、かつてペイトソンが問題にしたような、心理的拘束とコミュニケーションからも考えた方がよいと思っている。

私たちの研究会は、ランドスケープデザインに止まらず、有史以前からヒトたちが葛藤してきた造形への答えを示す試みである。

おわりに

文化とランドスケープデザイン研究会では、これからも新たな参加者を歓迎する。ランドスケープデザインに限らず、文化人類学を実社会へ応用することに興味がある皆さんは筆者のメールアドレスKGD02626@nifty.ne.jpまで気軽に連絡いただきたい。

謝辞

本稿をまとめるにあたって毎回の研究会に参加いただいている河合洋尚氏(東京都立大学)、陳昭氏(東京大学大学院)、酒井裕司氏(イメージランドスケーププランニング)、佐々木史郎氏(国立アイヌ民族博物館)、瀬川桂子氏(rashisaの庭)、隼田尚彦氏(北海道情報大学)、前田陽子氏(チンネルアトリエ)をはじめ設計家、計画家、研究者、大学院生の皆さまにはここで感謝の意を表したい。どうもありがとうございます。

引用文献

片桐保昭

- 2013 『名付けえぬ風景をめざして：ランドスケープデザインの文化人類学』北海道大学出版会、札幌。

河合洋尚

- 2016 『景観人類学—身体・政治・マテリアリティ』時潮社、東京。

Low S.

- 2017 *Spatializing Culture: The Ethnography of Space and Place*, Rutledge, New York.

(かたぎり・やすあき／(有)風土計画舎)